

RWL(聞きながら読む)学習法の有効性について — 京都産業大学文化学部初年次英語教育における プログラム実施とその効果 —

平成 24 年 5 月 1 日受付

加 野 まきみ*
ゴ ー ベ ル ピ ー タ ー *

要 旨

本稿では、本学文化学部における初年次必修英語科目内で一年を通して行ったRWL(聞きながら読む)学習プログラムの計画・実施からその有効性の検証までを概説する。230名の文化学部1年次生がこのプログラムに参加した。この学習法は、英語学習者が個々の単語に注目するのをやめて、より大きな単位でテキストを理解し、まとまった長さの英文を聞けるようになるために開発された。大量の英文を聞くというのは日本人英語学習者の大部分に欠けている練習である。学習者の英語運用レベルにかかわらずこのプログラムに参加できるように、CD付きのグレーディッド・リーダーを使用した。本プログラムを支える理論や実践、学生の学習記録の保存・管理に役立つMoodleReaderの機能を紹介し、運営上の問題点についても述べる。プログラムの有効性を検証した結果、RWLの学習量はリーディング・スピードや語彙認識の向上に寄与することを示している。

キーワード：多読学習，リスニング，ムードル，リーディング・スピード，語彙

1. はじめに(多読について)

EFL(外国語としての英語)の教育現場は多くの場合、言語学習の場としては非常に学習言語のインプットの少ない状況になりがちである。インターネットの普及などにより状況は変わりつつあるが、教室内でのインプットの量を増やすために教師ができることはそう多くはない。その解決策の一つが「多読学習」である。多読学習とは、グレーディッド・リーダーと呼ばれる、語彙レベル別に編集された小説等の簡略版(以下リーダーという)を大量に読むことである。個人の実際の英語力よりもやや低いレベルに設定された英文を読むことが効果的とされている。授業では新しい語彙・文法を学習するが、それを定着させなければ、実際の英語力のアップには繋がらない。定着のためには、その語彙・文法に繰り返し触れることが必要で、自分のレベルと関心の度合いに合致した英語リーダーを大量に

* 京都産業大学文化学部

読破することで、既習の文法や単語を定着させることができる。多読学習は、その支持者らが「言語運用能力を伸ばす、最も有効な唯一の方法である」と言うほどで(Maley 2005:354)、多読学習は読解力・文章力・語彙力、そして総合的な運用能力に多大な学習効果をもたらすといわれている(Day & Bamford 1998 参照)。また、様々な研究により、多読がリーディング・スピード(Bell 2001)、文法力(Yang 2001)、文章力(Tsang 1996)などの個々の L2(第二言語)能力や L2 運用能力全般(Yamashita 2008)の向上に効果を上げることが報告されている。

2. RWL(聞きながら読む)学習とは

第 2 言語学習・習得には耳からのインプットが欠かせない。Vandergrift(1999)によると、学習者がある言語の学習に成功するかどうかは、リスニングを学習にうまく使えるかどうかということが大きな要因の一つである。学習者に課せられるインプットの量と種類は個々の学習者により異なるが、L2 学習者が言語を習得するためには、理解可能な耳からのインプットが大量に必要であるということは広く受け入れられている(Rost, 2006)。EFL 学習環境においては教室内的コミュニケーションに母語が用いられ、得られるインプットの質も自然な発話とは異なる。「聞く」という動作の一方的な本質のため、リスニングの課題はたいていの場合、一方通行なものに終始することから、前述の通り L2 学習者は十分なインプットを得られないのだ。当然の結果として、英語学習者は生の英語を聞くと非常に難しく感じたり、理解できなかつたりすることになる。Goh(1999)、Chang & Read(2006)、Chang(2008)らは、L2 学習者はリスニングをする際、理解を助ける外部的な補助が必要で、その補助により理解が進むことによって、リスニングに対するモチベーションを保つことができると述べている。この「外部的な補助」というのは字幕やスクリプトなどといった形で提供される、音声教材の文字情報であることが多い。これらの補助を使って聞きながら読むと効果が上がるというわけである。

聞きながら読む(Read While Listening. 以下 RWL という)という学習方法は新しいテクニックではない。L1(母語)のリーディング・プログラムで何十年もの間使用されており、難読症の学習者には特に効果を上げている(Van Bon, Bokseld, Friede, & Van den Hurk, 1991)。子供に物語を読み聞かせることはたいていどこでもよい教育として認められており、特に子供と一緒に本を見て楽しみながら読み聞かせを聞くと、リーディング、リスニングの両方のスキルの大きな向上が生み出されるというのだ(Senechal & Cornell, 1993)。なぜそのような効果があるかという点、RWL によって、より大きな意味単位でテキストを理解するようになり、そうすることで理解度の向上にもつながるからである。その結果、RWL により、学習者はより高度な理解が可能になることに気づき、より効果的な読み方を身につけることができる(Amer, 1997; Dhaif, 1990)。

近年 RWL 学習が L2 のリスニング力の向上(Bell, 1998; Vandergrift, 2007)や語彙獲得(Brown, Waring, & Donkaewbua, 2008)に役立つとして、L2 学習における RWL の効果を指摘する研究がいくつかなされている。Vandergrift(2007)は、RWL 学習では耳で聞いたものを文字で確認することができるので、特に初級レベルの学習者が音を聞き分けるスキルを上達させるのに役立ち、上級レベルの

学習者には語認識の能力にさらに磨きをかける効果があることを明らかにした。同様に Osada (2001) は耳から入ってくるインプットと目にする文字情報が一致することで、学習者が形態と意味の関係を認識でき、語認識の能力の向上につながると述べている。

3. 多読学習支援ソフト MoodleReader について

3.1 多読学習の問題点

多読学習は教師や辞書の補助の必要がないので、授業時間外の課題として適している。しかし、学習時間外での学習を課す際に常に問題となるのは、学生が実際に課題をこなしたかどうかをチェックする方法である。どのようにすれば学生の学習状況を確認することができるのか。多読学習法の効果が広く認められているにもかかわらず、導入をする教育機関が少ないのはまさにこの点がネックになっているのである。従来は、担当教員が学生に、実際にその本を読んだことを証明させるための要約や感想を書かせるといった方法をとっていた。しかし、この方法では、本来大量に読むことが目的なのにもかかわらず学生にとっては要約・感想を書くという作業負担が大きくなり、教員にとっては提出された課題をチェックするのが時間的に大きな負担となり、多読学習の導入を諦めてしまうケースが多いのである。

3.2 MoodleReader とは

本学では MoodleReader という、 Moodle 上で学生の多読記録を管理するプログラムを開発し、全学的に運用している。 Moodle は誰でも無料でダウンロード・使用できる学習支援ソフトウェアで、 MoodleReader は Moodle の追加モジュールとして開発された。学生が授業時間外に英語を自習するシステムを確立し、現在決定的に不足していると言われる学習時間を確保すること、また、学生の自律的な学習を促進し、自分で学ぶという意識を身につけさせることを目的としている。教員はあらかじめ、学生のレベルや目標語数を設定し、学生は図書館に開架されているリーダーを読み、学内あるいは自宅から MoodleReader にアクセスして 10 問からなるテストを受ける。テストに合格すれば、その本が既読書として記録され、本の表紙が学生のページに現れ、その本の語数が既読語数に加算される仕組みになっている。 MoodleReader は、学生にとって難しすぎる、あるいは簡単すぎる本を読まないように、学生毎に設定されたレベルに合ったテストのみを受験可能とするように制御されている。テストには制限時間が設けられているので、まず本を読んでからでないと制限時間内にテストを終え、合格することは難しい。一つのテストを受けてから次に受けられるまでの間隔を教員が設定できるようになっているので、学期末に目標語数に達するために集中して読むのではなく、学期中継続的に読書を進めることになる。図 1 はテストの受験日、読んだ本のタイトル、合否、既読語数などが表示される、学生の学習記録画面である。上段には既読書の表紙、中央には既読書の語数等の一覧、下段には目標語数と現時点での到達点を示すカラーバーが表示されている。

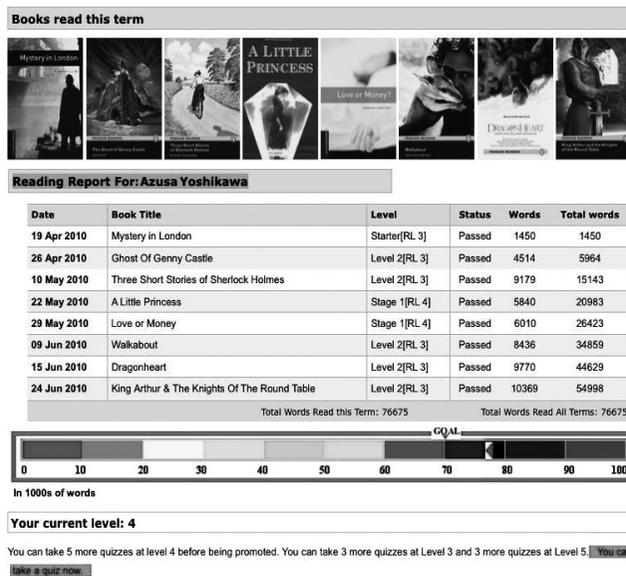


図1 学生の学習記録画面

教員用の管理画面では学生の学習状況を把握するための様々な機能がある(図2)。個々の学生やクラス毎の学習状況を閲覧できるだけでなく、集計をExcel形式でいつでもダウンロードできるので、学生の成績に組み込むことも容易である。そのほか、学生の読みリーダーのレベルの変更、目標語数の設定、テスト問題の追加・ダウンロードなど、教員自身が担当クラスについて様々な設定を行えるようになっている。

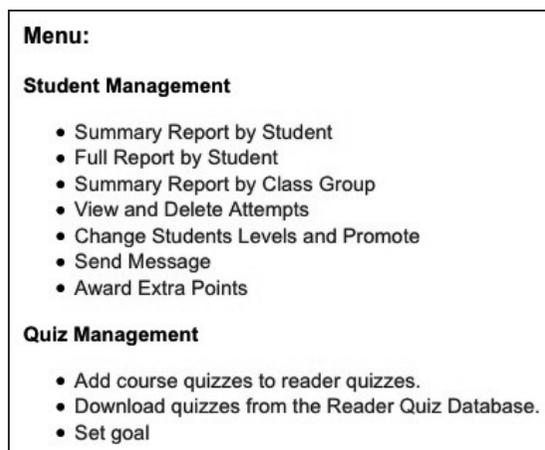


図2 教員用管理画面

2009年度にMoodleReaderを全学共通教育科目の英語コア科目に導入したことより、学生の英語学習時間が増加し、教員は学生の学習状況を把握することが可能となった。実際、図3では、深夜

12時から1時までが最もアクセスの集中する時間帯となっている(通年で2500回以上のアクセス数)。本学では1,600台を越えるコンピュータが学内で利用可能であるにもかかわらず、学生は大学にいるとき以外の時間で、本プログラムにアクセスし、テストを受けていることが分かる。

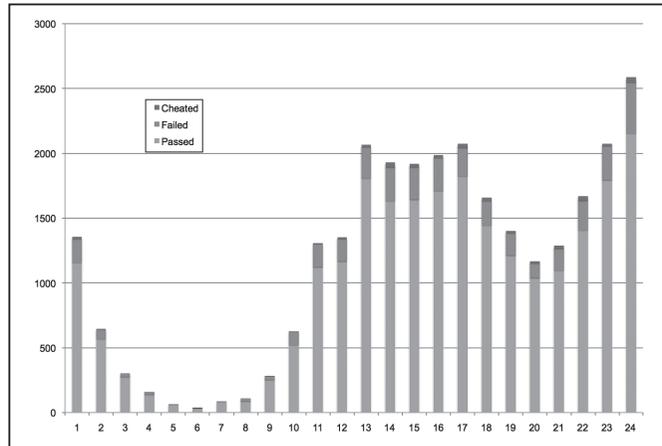


図3 学生のアクセス数とその時間帯

3.3 MoodleReader の有効性

2010年2月には、コア科目履修者(一年次生)ほぼ全員を対象に学年度末の統一試験を行った。前年度同時期の同一のテストと結果を比較すると、履修者全体では12.1点から15.7点へと平均点が上がり、どの学部においても前年度より読解力のスコアに大幅な向上($p < 0.001$)が見られた(図4)。2008年度と2009年度の入学生はプレイスメント・テストのスコアなどから、入学時の英語力に有意な差がないことがわかっており、カリキュラム上の変更もなかったことから、このスコアの向上は多読学習の導入によるものと考えられる。

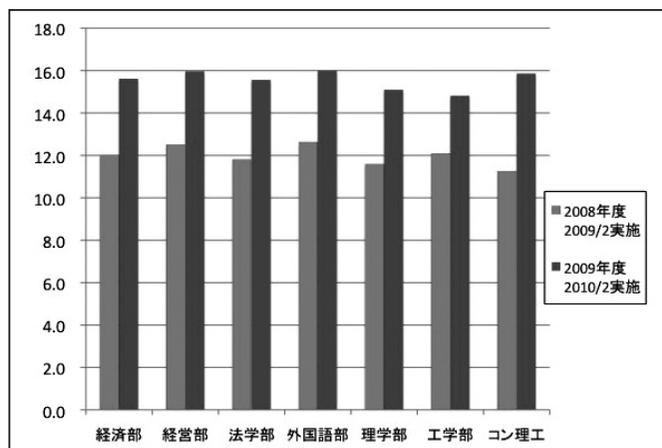


図4 学年末の統一試験の結果

本プログラムは当初本学図書館にあった本を利用し、本学英米語学科の教員によって作成された300のテストのみで2008年度にスタートしたが、現在では1000を超えるテストが他の教育機関の教員やオックスフォード大学出版などの多くの有名な出版社により作成され、利用可能となっている。また、本プログラムの有効性は、国際学会などでの発表の結果、広く認められようになり、現在までに国内外を含め50校以上の教育機関で本学が開発したMoodleReaderが導入され、その数は急速に増加している。その中心は日本と韓国であるが、同時にイギリス、カナダ、モロッコなどの教育機関でも利用されている。2010年には本取り組みが評価され、私立大学情報教育協会から奨励賞が授与された(Robb & 加野 2010)。

4. RWL プログラムでの MoodleReader の使用

本学文化学部のRWL(聞きながら読む)学習プログラムでも、このMoodleReaderを使用し、学生の多読・多聴の時間の増大の実現、その他リーディング・スピードや語彙力のアップを目指している。

4.1 対象

本プログラムの対象となる学生は、本学文化学部の1年次生230人で、入学時のプレースメントテストのスコアに基づき8クラスに分けられ、一年間リスニングを含む4つの英語の必修科目を履修する。学生の英語レベルはおおよそTOEFLスコアで310から500点の範囲である。

4.2 使用教材

本プログラムで使用する教材は本学図書館やLL資料室に所蔵されるリーダーの中から選ばれている。リーダーはその主要語彙数により、分類されており、本プログラムではLevel 1からLevel 4のリーダーを使用する。各レベルの主要語彙数と一冊平均の総語数は表1の通りである。リーダーのレベルがあがるにつれて、一冊の語数も増大するため、本研究ではRWL学習を行ったリーダーの冊数ではなく、学習した総語数を学習量として扱う。

表1 リーダーレベル別主要語彙数と一冊の総語数の平均

Level	主要語彙数	一冊の総語数の平均
Level 1	200-300	913
Level 2	300-400	1885
Level 3	600-700	3005
Level 4	1000-1200	5133

これらの教材にはテキストを読み上げた音声録音されたCDが付属している。音声は鮮明であるが、EFL学習者を対象にしているテキストであるため、読み上げの速度や発音などにおいて、純粋なネイティブ・スピーカーの発話とは言えないが、RWL学習には十分な目的を果たすと考える。

4.3 学習手順

リーダーレベルと到達目標語数は学生が属するクラス(入学時のプレイスメント・テストにより決定)により決められる。また、学生は本学習プログラム開始時に、学期ごとの成績の20%を占めることを知らされる。MoodleReaderの使い方、RWL学習の進め方のオリエンテーションを受けたあとは、学習を行うのは学生の自主性に任される。図書館でリーダーを借り、CDを聞きながら読書を行い、MoodleReaderでテストを受けるという学習サイクルを繰り返す。担当教員は定期的に学生が課題を行っているかチェックし、さらに学習を進めるよう呼びかける。

5. RWL 学習プログラムの有用性の測定方法

本学習プログラムの有用性を検証するため、以下の課題を設定した。

1. RWL 学習がスコアの向上にどのような影響を与えるか(あるいは与えないか)。
2. RWL による学習量(総語数)がスコアの向上に相関しているか。
3. 使用する教材のレベルがスコア向上に関与しているか。
4. 学生はRWL 学習や MoodleReader にどのような態度で臨んでいるか。

英語力の向上を図るための以下のようなテストを学生に4月と12月に課し、RWL 学習プログラムの有効性を測るための具体的なスコアとして使用した。

(1) 読解力

総合的な英語読解力の測定には、Pre-TOEFL(4月と12月に実施)のリーディング・セクションのスコアを使用した。

(2) リーディング・スピード

読むスピードを測定するには、リーダーから抜粋した、3つのまとまった文章からなるテストを使用した(4月と12月に実施)。テストはリーダー(Level 2)から抜粋されたそれぞれ2ページ分の文章を3分間自然な早さで読み、どこまで読んだか印をつけるというものである。3つの文章で同じことを行い、各回で読んだ語数の平均値を一分間の語数に換算したものをリーディング・スピードとした。

(3) 語彙数

語彙サイズの伸長を測るため語彙テストを行った。このテストは2000語、3000語、学術語彙レベル語毎の語彙テストを組み合わせて作成した(Nation 2011)。

(4) 学生の態度

学生がRWL学習にどのように取り組んだか、MoodleReaderやインターネット上で行う課題についてどのような考えを持っているか、12月にアンケート調査を行った。

6. 分析結果

6.1 英語力向上への効果

RWL学習量を独立変数としてMANOVA分析を行った。その結果、RWL学習量はリーディング・スピードと語彙認識の両方に有意かつプラスの効果があることが判明した(Wilks's $\Lambda=913$, $F(4, 178)=35.71$, $p<.0001$, $\eta^2=.45$)。Pre-TOEFL全体のスコアや各セクションのスコア向上には有意な効果はみられなかった。多重回帰分析では、RWL学習量が、リーディング・スピード($F(1, 182)=4.72$, $p=.03$)と語彙認識($F(1, 182)=8.50$, $p=.004$)の両方において、唯一の予測因子であるという結果を得た。3つ目の課題に関しては、リーダーのレベルはリーディング・スピードのスコア向上にやや効果があることが明らかとなった。語彙レベルは理解度の向上に直接関係があると仮定され、これはRWL学習後の語彙認識やリーディング・スピードについてのいくつかの研究で支持されている(Askildson, 2008 参照)。

6.2 学生のRWL学習に対する態度

RWL学習に対する態度を調査するためのアンケートには141名の学生が回答した。その結果、学生はCDの使用について前向きではなく、読む間にCDを使って聞くのを好まないということが分かった。しかしながら、興味深いことに、リスニング教材がインターネット上で、あるいはMP3プレーヤーで聞くことができるならば、読むながら聞くことにそれほど抵抗はないようである(図5)。また、RWL学習を授業時間外にしなければならないことについて、苦痛であると感じている学生が

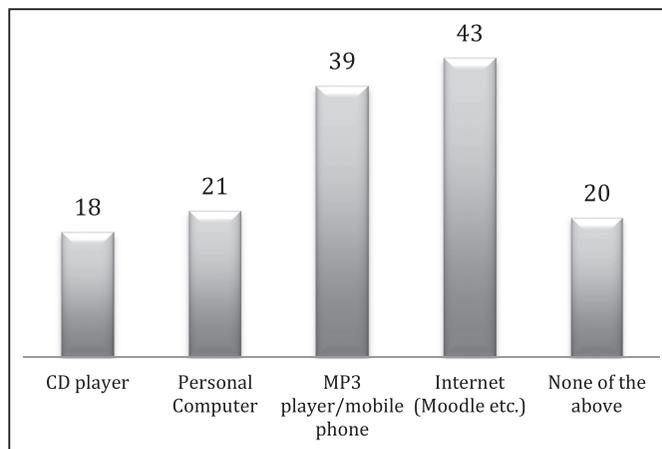


図5 RWLに使用したいメディア

多かったが、同時に彼らはRWL学習の重要性、有用性については認識しているようであった。ただし、授業時間内に取り組みたいと回答した。リーダー自体の内容に興味を持っている学生は少なく、ストーリーに没頭するようなことはない。ただし、一冊の学習をやり遂げたときには大きな達成感を感じているようであった(表2)。

表2 RWLに対する学生の態度

否定的な答え	肯定的な答え
授業時間内にRWLを行うのは好きではない。 授業時間外にRWLを行うのは嫌いだ。 授業時間外にRWLを行うのは苦痛だ。 RWLを行うのは楽しくない。 ストーリーに夢中になることはない。	授業時間内にRWLを行うのは苦痛ではない。 RWLは時間の無駄だとは思わない。 一冊読み・聞き終えたときには達成感がある。

7. まとめ

本研究はRWL学習の有効性を多くの点で示すと同時に、問題点も浮き彫りにした。RWL学習がリーディング・スピードや語彙認識の向上に寄与することはすでに述べたとおりであるが、学年末に行ったアンケートではいくつもの問題点が明らかとなった。特に、学生が授業時間外の課題に負担を感じていること、CDというメディアを使うことへの消極的な態度、もっと簡単に音声を聞いたりテストを受けたりする方法を希望していることなどである。また、一年間のプログラムの実施を通して、教員側の問題も明らかになった。MoodleReaderやRWL学習の手順について、学生に十分な説明を行わなかった(行えなかった)教員も少なからずいるのである。各教員がMoodleReaderやRWL学習をより熟知し、学生に十分な説明を行えていれば、本学習プログラムの成功はさらに大きなものになったであろう。

参考文献

- Askildson, L. R. (2008). The effects of reading while listening : Developing L2 reading via phonological recoding. Unpublished manuscript.
- Amer, A. (1997). The effect of the teacher's reading aloud on the reading comprehension of EFL students. *ELT Journal*, 51, 43-47.
- Bell, T. (1998). Extensive reading : why and how? *The Internet TESL Journal*, 6.
- Bell, T. (2001). Extensive reading : speed and comprehension. *The Reading Matrix*, 1 (1).
- Brown, R., Waring, R., Donkaewbua, S. (2008). Incidental vocabulary acquisition from reading, reading-while-listening, and listening to stories. *Reading in a Foreign Language*, 20, 136-163.
- Chang, C.-S. (2009). Gains to L2 listeners from reading while listening vs. listening only in comprehending short stories. *System*, 37, 652- 663.
- Chang, C.-S., Read, J. (2006). The effects of listening support on the listening performance of EFL learners. *TESOL Quarterly*, 40, 375-397.
- Day, R., J. Bamford (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*, Cambridge : Cambridge

University Press.

- Dhaif, H. (1990) Reading aloud for comprehension: A neglected teaching aid. *Reading in a Foreign Language*, 7, 457-464.
- Ellis, R. (2005). Principles of instructed language learning. *System*, 33, 209-224.
- Goh, C. (1999). How much do learners know about the factors that influence their listening comprehension. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics*, 4, 17-40.
- Krashen, S. (1993). *The Power of Reading: Insights from the Research*, Libraries Unlimited, Englewood, CO.
- Maley, A. (2005). Review of 'Extensive Reading Activities for the Second Language Classroom'. *ELT Journal*, 59, 354-355.
- Markham, P., Peter, L., McCarthy, T. (2001). The effects of native language vs. target language captions on foreign language students' DVD video comprehension. *Foreign Language Annals*, 34, 439-445.
- Mason, B., Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. *System*, 25, 91-102.
- Osada, N. (2001). What strategy do less proficient learners employ in listening comprehension? A reappraisal of bottom-up and top-down processing. *Journal of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 5, 73-90.
- Rost, M. (2006). Areas of research that influence L2 listening instruction. In: Uso-Juan, E., Martinez-Flor, A. (Eds.), *Current Trend in the Development and Teaching of the Four Language Skills*, Mouton de Gruyter, Berlin, 47-74.
- Robb, T., 加野, M. (2010) 「授業時間外の学習時間の増大による英語力の向上」『論文誌 ICT 活用教育方法研究』13-1, 6-10.
- Senechal, M., Cornell, E. (1993). Vocabulary acquisition through shared reading experiences. *Reading Research Quarterly*, 28, 361-374.
- Tsang, W. (1996). Comparing the effects of reading and writing on writing performance. *Applied Linguistics*, 17, 210-233.
- Van Bon, W. H. J., Bokseveld, L. M., Freide, T. A. M., Van den Hurk, A. J. M. (2001) A comparison of three methods of reading while listening. *Journal of Learning Disabilities*, 24, 471- 476.
- Vandergrift, L. (1999). Facilitating second language listening comprehension: acquiring successful strategies. *ELT Journal*, 53, 168-176.
- Vandergrift, L. (2007). Recent developments in second and foreign language listening comprehension research. *Language Teaching*, 40, 191-210.
- Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency, *System*, 36, 661-672.
- Yang, A. (2001). Reading and the non-academic learner: A mystery solved. *System*, 29, 451-466.

Implementing a Year-long Reading While Listening Program for First-year University English Students at Kyoto Sangyo University

Makimi KANO
Peter GOBEL

Abstract

This manuscript describes the results of a year-long Reading While Listening (RWL) program run for university first-year English students at Kyoto Sangyo University. A total of 230 ESL learners participated in the program. The program was developed to help L2 readers shift attention from individual words to the syntax and semantics of the written text, and to give students practice in listening to spoken English at length— a practice that the majority of Japanese students lack. To make the program accessible to low-level learners, graded readers with accompanying CDs were used. The theory and practice of program, and the Moodle module that keeps records of student progress (MoodleReader) are described, along with some of the administrative and logistical problems encountered. The results of the program suggest that the amount of RWL had a significant and positive effect on both reading speed and vocabulary recognition.

Keywords : extensive reading, listening, Moodle, reading speed, vocabulary